

中古末法期から紐解く現代社会の死生観序説（上）

—隠遁者西行，その生涯からみる死生観—

植村雅史

I 序

西行に惹かれる人たちの理由は、その歌の魅力すなわち観念的・客観的でなく実に抒情的・主観的な内容が、読む人それぞれに投影されるからであろう。仮に順がどちらであろうとも、「歌抄」から西行を知れば次は「人間」西行が知りたくなり、「人間」西行から入ればそのまま「歌抄」へと興味が引き継がれるであろう。この「歌」と「人」双方がともに魅力的だからこそ、これほどまでに後代に人気を博すのであろう。

では、「人間」西行の魅力の源とは何なのであろうか。

おそらく、こうなるであろう。「若くしての出家」と。

もしも西行が一生成俗の人間であったとしたらどうであろう（これについては、諸家が激動の十二世紀社会の政治史が大きく変わっていたのではないかと推論されているところでもある）。否、仮に出家をしたとしても、それが晩年期に入ってからのものであったとしたらどうであろう。もしくは血筋や生活環境が平凡なものだったらどうであろう。まだまだ、挙げられるかもしれないが、とにかくこれらの出家時の西行の年齢やステータスなどの諸条件が、出家という個人的な決断に花を添えているといえそうである。そして、その出家の原因や動機ということが、西行七十三年の人生を貫く思想と一対の関係を成しており、その深遠なる西行の「心」の奥に惹かれるのであろう。

他方、拠るべき資料が限定されていることもあり、判然としていない、また解明のむずかしいのが「人間」西行でもある。しかし、逆説的ではあるが、そのようなことが読者の尽きぬ所以であり、稿者自身の興味の源泉でもある。それと同時に、今なお論争をつづけて決着をみない部分が多い人物であること、よってそのような問題をはらんだうえで論じることが必然となることを念頭におく必要もある。

そのような人物を追究していこうと考えるのは、西行の生涯にわたる思想や行動といったものが、閉塞する現代の人々にとってのなんらかの光明につながるのでは

ないかという思いがあつてのことである。そのうえで、人間観・死生観といった思想に焦点をあて、今後長期にわたってそれを検討するためには、まずはその序説となるべく全体的な構図を描く段からはじめなければならない。よって本稿は、その「人間」西行、「思想家」西行を今後追究していくための初歩としての位置づけとしたいと考えている。

そこで、まず本稿（上）において西行の出生から出家、そして高野山に移住する三十歳ころまでの前半生を概観し、つづく（下）では高野山時代から河内国弘川寺で入寂する七十三歳までの後半生を、縦軸に時間、横軸に事蹟・人間関係をとって整理しようと思う。

II 西行の基礎的背景

1. 生涯区分

歌人西行・出家者西行・勸進聖西行・思想家西行などさまざまな面を持つ「西行」については、それぞれの角度から研究が進められてきている。そして、それらの研究を共通して支えている枠組みがある。それは、川田順氏が『西行研究録』¹において画期的な成果として発表した、西行の一生を五つの時代区分に分けたものである。残された資料が限られている西行をたどっていくうえでは、西行自らの言葉としての家集と西行に仮託にして成立した伝記を、効果的にかつ想像的に組み合わせて考証していくことが求められる。そして、その作業を合理的に行なうためにも、西行の人生における転換点をプロットして区分けしたのである。

出生から出家までの在俗時代を第一期（元永元年から保延六年、西行二十三歳まで）。出家直後から都周辺に庵を結び隠遁生活を開始し二十六歳もしくは三十歳頃（その説は別れるところではあるが委細後述）に、初度陸奥の旅に出立してから帰洛するまでの凡そ二十代を第二期（永治元年から久安三年、西行三十歳まで）。さらに、第三期は陸奥行から帰り六十三歳で伊勢に移住するまでの約三十年間の拠点となった高野山時代の前半、すなわち四国への旅の前まで（久安四年から仁安元年、西行四十九歳まで）と、四国から帰洛し再びの高野山での生活となる約十年が第四期（仁安二年から治承三年、西行六十二歳まで）となる。そして、高野山を出て伊勢に移住してから示寂する河内弘川寺までの十年ほどの晩年期（治承四年から建久元年、西行七十三歳まで）を第五期とされた。この区分について、その合理性に賛成しつつさらに出家直後の第二期を「京洛時代」、第五期を「伊勢河内時代」とすれば、「地理的名称によって区分を立てる」ことができると風巻景次郎氏は『西行』²の

なかで提言されている。

以降、プロットの基準を若干前後させることはあっても、概ね西行研究における基盤となる時代区分法となっている。稿者自身も、至極適当な区分であると考えている。そこで、この五区分をベースにしたうえで、本稿では第三期（高野時代前期）と第四期（高野時代後期）を一括して第三期と扱おうと思う。それは、作歌年時が不明な作品がほとんどである西行の歌を引用するにあたり、狭い区分に厳密に当てはめることで生じる誤用を極力回避したいがためである。

2. 著作

西行自らがその思想を語っているのは、歌をとおしてという形態だけである。すなわち、歌集でしか西行の内面的なことを追うことはできない。もちろん、歌抄をとおして内面に迫るというのも、正確な表現をすれば推察の域を越えることはできないということになる。たとえば、この時代背景で、西行の周りでこのようなことが起こり、それをモチーフにしたと思われる歌とその詞書という組み合わせで、おそらくこのようなことを思念しているのだろうと推察するということである。そのような追究形態となるのが西行研究であるのだが、さらにややこしいのは、今日まで伝えられてきている西行の歌集さえ、自らの編集のものなのかそうでないのかが判然としないものが多いということである。それらを列挙するとこのようになる³。

1. 山家集（六家集本山家集，流布本山家集と呼ばれるもの）
2. 聞書集
3. 聞書残集
4. 異本山家集（西行法師家集，西行上人家集と呼ばれるもの）
5. 山家心中集
6. 御裳濯河歌合
7. 宮河歌合
8. 西行上人談抄（西公談抄，西行談抄と呼ばれるもの）

6, 7については、その晩年に自ら編纂したことがわかっているのだが、1～5についてはよくわかっていない状態である。8は晩年西行の弟子となった蓮阿による歌論書である。

また、歌集のほかには、日記や説話集などで西行のことが取り上げられているものが存在する。後に引用することとなるが、いくつかを挙げてみる。まずは『撰集抄』である。これは、吉本隆明氏が『西行論』⁴の冒頭で「西行を知るための一等資

料とはなにか、ということになれば、『山家集』の歌をのぞいて『撰集抄』に指を屈するほかないだろう」と書かれている。一方で、目崎徳衛氏は『西行の思想史的研究』⁵において「『撰集抄』が西行に仮託した虚構なることはいままでもない」といわれている。ほかには、西行の示寂後五十年ほどでつくられはじめたともいわれる『西行物語』と『西行物語絵巻』。断片的に取り上げる形では、西行から遅れること三十七年後に生を受け、ほぼ同時代を生きた鴨長明の遺した『方丈記』『発心集』、さらには『明恵上人伝記』『今物語』『十訓抄』『古今著聞集』『沙石集』『井蛙抄』などの説話集がある。また、貴顕による公式な資料としては、悪左府藤原頼長の日記『台記』や『後鳥羽院御口伝』などが挙がる。これらの文献には、これまでに事実として考証されたものも、いかにも作り話と思われるものも含めて存在している。

3. 系譜

まずは西行本人についてであるが、西行とは号であって僧名は円位、そして俗名を佐藤義清という。父系は魚名流藤原氏で、平将門の乱を平定した依藤太秀郷の後裔であると『尊卑分脈』からはみてとれる。この『尊卑分脈』は、正式には『新編纂図本朝尊卑分脈系諸雑類要集』といい、系図という性質を考慮すると信頼度においてはどこまでのものといえるのかを決めるにはむずかしいが、これまでに残されている系図として『尊卑分脈』がもつ意義は大きいといえる。

魚名とは、藤原不比等の男子四人が立てた、いわゆる藤原四家における北家房前の男子である。その魚名の五子である藤成の曾孫が秀郷であり、ここから武人の家筋となり義清に至った。秀郷の子には千晴・千常兄弟がおり、千晴の家系は奥州藤原となり、千常の方は鎮守府将軍となり東国を治めることとなった。義清は千常の家系となる。義清の二代前つまり祖父は『尊卑分脈』によれば佐藤季清なる人物で「使・従五下・左衛尉」、父康清は「使・左衛門尉」という衛府官人であり、代々紀伊国那賀郡の粉河寺と根来寺両刹の中間に位置する田仲庄を知行していた。この田仲庄は摂関家領であることより（陰陽文庫所蔵『近衛家領目録』「庄々間事」）、「紀ノ川中流の肥沃な土地と摂関家の庇護は、佐藤氏に富裕な領主生活を保証したものとみられる」と目崎氏⁶は書かれている。

しかし、目崎氏は、藤原頼長の日記『台記』「康治元年三月十五日条」

西行法師来りて云ふ、一品経を行ふに依り、両院以下、貴所皆下し給ふ也。料紙の美悪を嫌はず、ただ自筆を用ふべしと。余、不軽承諾す。また、余、年を

問ふ。答えて曰はく、二十五と。(去々年出家二十三)、そもそも西行は、もと兵衛尉義清也、(左衛門大夫康清子)、重代の勇士たるを以て法皇に仕ふ。俗時より心を仏道に入れ、家富み年若く、心に愁ひなけれども遂に以て遁世す。人、之を嘆美するなり。

にある「家富み」「重代の勇士」とあることから尾山篤二郎氏が『西行法師全歌集』⁷ 付載の「西行法師の生涯」において「家富みといひ、重代の勇士と云うことは、俵藤太の武門の名家であるから重代に相違なく、またそれだから代々の莊園所領の地方的地盤は古くから源平両氏を凌駕するものがあつたろう」と書かれていることに対しては、風巻氏⁸が「今後莊園資料の社会的経済史研究の行きとどく」ことで反証できると示唆したことをもって考証されたうえで、源平両氏を凌駕するほどのものではないと反駁された。

次に母系である。西行の母は『尊卑分脈』に「母監物源清経女」と記されているが、系譜は未詳である。しかし、この監物源清経については考証されている。水原一氏⁹の論に山木幸一・角田文衛両氏が言及したうえで今様の秀でた人物とし、堀部正二氏¹⁰は藤原頼輔の『蹴鞠口伝集』を引いて「かの監物源清経も蹴鞠の好士として知られた人」と結論された。また、目崎氏¹¹は、滝川政次郎氏が『長秋記』に言及した記事より、「清経には言及しておられないけれども」、「江口・神崎の遊里の内情にも精通した、当代随一の数寄者であった」ことは確実であろうと述べている。このようなことから西行の文武の才は母系となる清経から由来しているといわれている。

妻子、および兄弟についても諸説ある。川田・尾山・風巻諸氏は妻子の存在に否定的な立場を取られたが、石田吉貞氏¹²は「中世の諸書の伝える説の中には、相当に信用すべきものがある」として、『発心集』「西行女子出家事」の伝を徴証し、「西行に女子があったことも、また、したがって妻があったことも信じてよいことと考える」とされた。

子どもについては、『尊卑分脈』には「権律師隆聖」という男子があるという説と、『西行物語絵巻』で有名な出家の決心を神仏に祈り帰宅した義清が、それを出迎えて袂にとりすがってきた四歳になる娘を、恩愛の絆を断つために心を鬼にして縁から蹴り落とした際の絵があることから、女子が存在したという説が立っている。兄弟についても、『尊卑分脈』には「仲清」が康清の男子として義清とともにみえるのだが、これが兄もしくは弟ということについても両論がある。

III 第一期「在俗時代」

1. 誕生から出仕まで

この第一期「在俗時代」のクライマックスは、当然二十三歳にして出家したことであろう。その出家の動機についても諸説あるのだが、まずはそこに至るまでの個人史をたどることで考えていきたい。

元永元年（1118）に生まれた佐藤義清は、前述のごとく下官の家ではあったが裕福な環境で不自由なく少年期を送った。晩年の伊勢在住時代には、歌を学ぶ者たちへ『古今集』を勧めていたことから、義清自身も作歌に入る以前の少年期にはそれを手に取っていたと思われる。そして、窪田氏は『西行の研究』¹³において、白河院の院宣を受けて撰集した『金葉集』も『古今集』と同様に座右に置いていたのではないかということ『西行上人談抄』から引いて推測されている。また、歌のみならず十四歳の頃には藤原成通から蹴鞠を習いはじめたといわれ、「西行法師出家より先は徳大寺左大臣（実能）の家人にて侍りけり」¹⁴とあることから、加冠後の十五・六歳で徳大寺実能の隨身となり出仕することで世に出るようになったと考えられる。徳大寺家には義清の祖父の代あたりから属していたらしいが、この徳大寺家は多くの皇族との外戚関係を結ぶ家柄で、鳥羽院の皇后であり、崇徳・後白河両院の母でもある待賢門院璋子は実能の妹にあたる。よって、徳大寺家に隨身することは、皇室に接する機会を得ることになったともいえる。また主実能は、「徳大寺左大臣という名称で、歴代の勅撰集ほとんどすべてに歌の採られた歌人であった」ので、義清の「歌修行は実能家の雰囲気に育まれたこともほとんど断言でき」¹⁵よう。

そして、十八歳のときに成功して兵衛尉の官を得て鳥羽院に下北面の武士として仕えるようになった¹⁶。同じ時期、北面の武門として近習の詰所には同年齢の平清盛がいた。北面とは、白河法皇の御代に、御幸の供奉、院の警固を主な任務として設置された制度であり、眉目秀麗かつ弓馬の道のみならず詩歌管弦にも通じているものであることを条件とされていた。この頃の秋の歌として、鳥羽城南離宮の正殿東側の庭先に藤原宗輔が献上した菊を詠んだものがある。年時の判断しづらい西行の作品にあって、おそらく家集に残る最初の歌であろうとされている¹⁷。

京極太政大臣，中納言と申けるをり，きくをおびたゝしき程にしたてゝ，鳥羽院にまいらせ給たりけり，鳥羽の南殿の東面のつぼに，ところなきほどにうへさせ給たりけり，公重の少将，人とすゝめてきくもてなされけるに，くはゝる

べきよしありければ

466 君がすむやどのつぼをばきくぞかざる 仙のみやとやいふべかるらん¹⁸

この菊の会を催したのは、徳大寺実能の兄である大宮権中納言通季の子を実能が養子として育てた公重であった。その公重少将が院に奉る賀歌として、菊を詠むことをもとめた幾人かのなかに義清がいたことが詞書からわかる。このことから、西行はその頃すでに公重からは歌人としての評価を得ていたことがうかがえる。

他方、尾山氏は『西行法師評伝』¹⁹で、義清は源為忠から作歌指導を受けたと推測された。いわゆる「大原の三寂」の父であり、藤原北家閑院左大臣冬嗣の子長良から出た筋の丹後守為忠といわれる人物である。義清十九歳のとき保延二年に没しているが、為忠の妻は待賢門院に仕えた女房橘大夫の女だったことから徳大寺家に縁故の者であったと考えられた。さらに、天養元年（1144）鳥羽院勅撰の『詞花集』撰集において、三寂兄弟が亡父の歌を入撰させるべく尽力するのだが、その際に撰集資料として提出するための歌稿を西行に下読みさせたことを根拠として、義清が為忠の門下だったのではないかと考えたのである。

このように在俗時代の西行は、一般的には「家富み」「重代の勇士」とみられたであろう生活を送っていた。しかし、他人の眼には映らなくとも、かれの心のなかには出家の動機となるものが膨らんでいたのかもしれない。一時の思いつきで出家をすることは考えにくい。となれば、その動機というものは、小さい種のようなものから萌芽して花を咲かせ実するという段階を経るようなものであろう。その種が、いつからかれの心のなかに存在するようになったかは誰の知るところではないが、その種から萌芽に向けての段を担ったのではないかという一つの出来事が、保延四年（1138）西行二十一歳の頃に起こっている。空仁上人との出会いである。

2. 空仁上人

先の『台記』にあるように「俗時より心を仏道に入れ」ていた義清は保延四年（1138）二十一歳の頃に、西住とともに法輪寺（京都嵐山の真言寺）の空仁を訪ねている。西住はのちに同行といわれる生涯の友で、俗名を鎌倉二郎源次兵衛季正といい義清と同じ頃に出家した人物である。『千載集』には四首入撰している歌人でもあった。そして、空仁上人は年齢、没年ともに明らかではないが、西住と同じく『千載集』に四首採られている²⁰。この義清、西住、空仁上人の三人がたちまちに意気投合したことが、『聞書残集』に連作として収められている作品とその詞書や連作最後の歌

に付されている左注からうかがうことができる。

いまだよのがれざりけるそのかみ、西住ぐしてほうりんにまいりたりけるに、
空仁法師経おぼゆとて、あんじちにこもりたりけるに、ものがたり申てかへり
けるに、ふねのわたりのところへ、空仁まできてなごりをしみけるに、いかに
のくだりけるを見て

空仁

22 はやくいかだはこゝにきにけり
うすらかなるかきのころもきて、かく申てたちたりける、いうにおぼえけり
おほみがはかみにみせきやなかりつる

と付句している。そして、この一連の贈答歌の最後の句となる

26 さとよむことをば人にきかれじと

の左注として、

申つゞくべくもなきことなれども、空仁がいうなりしことをおもひいでとぞ、
このごろはむかしの心わすれたるらめども、うたはかはらずとぞうけたまはる、
あやまりて、むかしにはおもひあがりてもや

とあり、義清が西行と号してからの晩年に思い出しつつ語ったことを『聞書残集』
の筆者が書き留めていることがわかる。このことから安田章生氏は『西行』²¹のな
かで、空仁上人の着ていた衣の色まで覚えていることから、若き日の義清に強烈な
印象を残したうえに、上人の姿やその生きる姿勢が「優なり」と思えて、「世を捨
て、仏道修行に励みつつ、興湧けば歌も詠み、一所に定住せずして風のように自由
に生きる空仁のような隠遁者への憧れと親しみとを、より確実に深めたのが、空仁
と出会った西行の一日だった」と推測されている。

3. 鳥羽院

義清の出家につながる動機の一つに「政治原因説」がある。それは、貴族政治の
衰退から武家政治への社会変革、そしてそれによる争乱勃発の必然性を予測したう

えで、それらを回避するために出家したというものである。その予測を立てるには、貴族・武士双方の実態を知りていなければならない。したがって、その位置に義清はいたということとなる。単に北面に出仕していた武士というだけでは、下北面だけでも八十名ほどが仕えていたことを考えれば、皇族・貴族の中樞をうかがい知ることはむずかしかったはずである。しかし、義清はその北面のなかにあつて、鳥羽院からの信頼を得ていた人物であつたのである。むろんそれは、皇后待賢門院璋子の兄が、義清が隨身していた徳大寺実能だつたことが大きく作用している。その鳥羽院と義清との距離を『山家集』より知ることができる。

一院かくれおはしまして、やがての御所へわたしませけるよ、高野よりい
であひてまいりあひたりける、いとかなしかりけり、このまぢをはしますべき
所御覧じはじめける、そのかみの御ともに、右大臣さねよし、大納言と申ける、
候はれけり、しのばせをはしますことにて、又人さぶらはざりけり、その御と
もにさぶらひけることのおもひいでられて、おりしもこよひにまいりあひたる、
むかしいまの事おもひつゞけられてよみける

782 こよひこそおもひしらるれあさからぬ 君にちぎりのあるみなりけり

これは、保元の乱前夜の保元元年（1156）七月二日に鳥羽院が崩御された折に西行が詠んだ歌であるが、その詞書に書かれていることは、在俗時代の保延五年（1139）二月二十二日安楽寿院三十塔の落慶供養の前に、その施行段階でひそかに鳥羽院が訪れるにあつて、実能と義清の二人だけがその御供を仰せつかつたときのことである。その安楽寿院本塔に鳥羽院の遺骸を移す夜の感慨を詠んでいるのであるが、あくまでも実能が御供にあたり義清はその警護が任務であつたにせよ、そこにただ一人北面から随伴できたという事実は院と義清との関係をうかがわせるものである。

4. 待賢門院璋子

また、出家の動機には、「失恋原因説」も挙げられている。その対象として考えられている一人に、待賢門院璋子すなわち鳥羽院の皇后がいる。義清は、その皇后待賢門院とも徳大寺実能の妹ということで、鳥羽院よりも早い段階で接近していたであろうと考えられる。たしかに、康治元年（1142）の門院落飾のときの一品経書写の依頼における奔走、初度陸奥の旅の契機ともなつたと考えられている久安元年（1145）の四十五歳での崩御における落胆、門院に仕えた堀河局²²、中納言局、兵

衛局といった女房たちとの終生つづく人間関係などから、義清の生涯にとって非常に大きな存在であったことは間違いがなさそうである。白洲正子氏は『西行』²³のなかで、義清出家後の京洛時代に嵯峨の庵に暮らしていたのは、ただ景色が美しく静かだということだけではなく、そこに待賢門院が晩年を送った法金剛院があるからではないかと推測している²⁴。

たとえば生前の門院への思いを、堀河局へ送った哀愁歌とその返しの歌が『山家集』に残っている。

待賢門院、かくれさせおはしましにける御あとに、人／＼またのとしの御はて
まで候はれけるに、みなみおもての花ちりけるころ、堀川の局のもとへ申をく
りける

779 たづぬともかぜのつてにもきかじかし 花とちりにし君が行ゑを
返し

780 ふくかぜの行ゑしらするものならば はなとちるにもをくれざらまし

ちなみに、堀河局は姉妹ともども長らく門院に仕え、落飾に際しては中納言局とともに出家しているほどである²⁵。なお、この返しからもわかるように、堀河局の作歌能力は非常に高いものであって、百人一首八十番には

長からむ心も知らず黒髪の 乱れて今朝はものをこそ思へ

が採られており、家集には『待賢門院堀川集』「群書類従巻二七九」があり、『金葉集』に六首、『詞花集』に二首、『千載集』に上の歌を含めた十五首と勅撰集にも入集している²⁶。

5. 崇徳天皇

その待賢門院を母にもち、後の保元元年（1156）に藤原頼長と結託して起こした保元の乱に失敗したことで讃岐に配流され、生まれながらに暗い影を背負わされたままに長寛二年（1164）四十六歳でその凄惨さをきわめた生涯を閉じた崇徳天皇との関係も、義清の生涯にとっては重要なものである。待賢門院の皇子として誕生するも、鳥羽天皇ではなく白河院との間に生まれた不義の子であったことは当時周知のことであった。その出自が最後までかれを苦しめることになったのだが、在俗時

代の義清とは、待賢門院一徳大寺家のつながりから、歌を通じての近しい間柄になったと考えられている。崇徳院も義清同様に作歌における高い素養があるうえに数寄心でも共通するところを感じていた。年齢も義清の一歳年少ということもあり、かなりの知遇を得ていたと思われる。そして、崇徳院が勅撰の宣旨を六条頭輔に下した『詩花集』に、一首がよみ人知らずではあったが入撰していることがその関係性を物語っている。これは、西行三十四歳にして初めての勅撰集入撰を果たした作品である。よみ人知らずで採られているのは、中央歌壇とは一線を画した独自の境地を開拓していた凡下の身分だったからであったが、もちろん崇徳院の縁故からだけの入集ではなく、一つの作品として正当に評価され歌人としての力量が認められたからであることはいうまでもない。

身をすつる人はまことにすつるかは すてぬ人こそすつるなりけれ²⁷

しかし、そのような深いところでのつながりがあるだけに、特に保元の叛乱から讃岐配流、そして崩御までの院の政治欲と数寄心の間に生じた葛藤でもがく姿は、西行の思想に少なからぬ影響を及ぼすこととなったと考えられる。

6. 出家

『百鍊抄』（第六）保延六年十月の項に、「十五日。佐藤右兵衛尉憲清出家。年廿三。西行法師と号す」とある。ちなみに『百鍊抄』は、鎌倉初期に編纂された安和元年（968）から正元元年（1259）までの都の事情を知ることのできる歴史書で編者は不明である。この『百鍊抄』では義清ではなく憲清と書かれている。資料によって「憲清」、あるいは「則清」、「範清」と少なくとも四通りの表記があるとされている²⁸。

前述の如く、義清の出家の動機については諸説ある。

たとえば『西行物語』には、北面の同僚であり、親族の一人としても親しい存在であった佐藤憲康の突然の死がそれであったと書かれている。「あしたは必ずことにきらめきて参り給へ」と約束を交わしてから別れた翌日、「参りざまに誘ひければ、門にひとびと多く立ち騒ぎ、内にもさまざまに泣き悲しむ声」が聞こえてきた。それは憲康が昨夜急死したというものであった。その妻や母親が人目を憚らずに泣き、悲歎に暮れる姿を目の当たりにして西行は、「いよいよかき曇る心地して、風の前の燈火、蓮の浮葉の露、夢のうちの夢と覚えて、やがてここに髪を切らばや」と思い、

出家を決断したというのである。

また『源平盛衰記』「卷八、讃岐院の事」では、

さても西行発心のおこりを尋ぬれば、源は恋ゆゑとぞ承る。申すも恐れある上臈女房を思い懸けまゐらせたりけるを、「阿漕の浦ぞ」という仰せを蒙りて思ひきり、官位は春の夜見はてぬ夢と思ひなし、楽しみ栄えは秋の夜の月西へとなぞらへて、有為の世の契りを遁れつつ、無為の道にぞ入りける。阿漕は歌の心なり。

伊勢の海阿漕が浦に引く網もたび重なればひともしぞ知れ

といふ心は、この阿漕が浦には、神の誓ひにて、年に一度のほかは網を引かずとかや。

この仰せを承つて、西行が詠みける

思ひきや富士の高嶺に一夜ねて雲の上なる月を見むとは

この歌の心を思ふには、一夜の御契りはありけるにや。重ねて聞こしめすことのありければこそ阿漕とは仰せけめ。情なかりけることどもなり

と、出家の動機が「恋ゆゑ」であるとしている。西行は「申すも恐れある」上臈女房と恋に落ちた。それは一夜限りの契りであった。しかし、決して結ばれることのない運命に上臈女房は金輪際逢瀬を重ねないことを誓い、義清を遠ざける。そして、その激しく狂おしい恋慕を断ち切らんがために出家という選択をしたというのである。

この「申すも恐れある」高貴な上臈女房について諸家による論が展開されている。川田氏は、待賢門院に仕えていた堀河局や、その妹の兵衛局を挙げられている。それに対しては年齢の問題がある、すなわち二人の局がともに西行よりも十歳から十四、五歳ほど年長であることが比定しづらい点であるという反論がある。また尾山氏は、鳥羽院の中宮であり、璋子のライバルでもあった美福門院得子を想定されている。そして、先にも触れたように待賢門院その人との推測もある。たとえば角田文衛氏は、『待賢門院璋子の生涯』²⁹のなかで決してその名を出すことなく巧妙に論を導いている。しかし、決定的な状況証拠がない以上、推論はすべて想像の域を出るものではないといわざるを得ない。

また、佐藤正英氏は『隠遁の思想』³⁰のなかで、「隠遁は世俗世界に心弱く屈服し、敗退する在りようではない。(中略) 世俗世界の無常によって挫折を余儀なくされた

恋になお固執し、恋を絶対願望として捉えかえす在りようである。何に対する願望がそのひとにとって絶対願望であるのかはさまざまである。（中略）西行の隠遁の動機は「恋ゆゑ」であったが、高貴な上臈女房への恋ではなく、眉目秀麗な憲康への恋であったと思われる。二歳年上の青年の急死であったのだろう。恋が絶対願望となったとき、恋は眉目秀麗な青年といった直接の対象をつきぬける。恋は直接さを失い、観念に彩られる。観念は性急で、青臭く、その生硬さ世俗世界に馴染み難い。西行の内にそれと気づかないままに絶対願望と化した恋がわだかまっていたのであろう。憲康の急死は絶対願望を一挙に噴出させたのであろう」と推測している。同様に、目崎氏は『数寄と無常』³¹において、遁世の原因を「北面の特殊なあり方」に関連させて考えた。つまり、鳥羽院との特別な関係に着目されたのである。しかし、氏も強調しているように、決して「男色原因説」などといっているのではなく、「遁世の前提に存した状況」としての説であった。あくまでもそれは、出家遁世の「きっかけ」ではなく、「動機の一部」という意味であろう。

これらについては吉本氏が『西行論』のなかで、「親友憲康の死にあつて、一途に出家に踏み切ったという挿話を、<事実>の次元でうけとめれば、『台記』に記された「在俗中から心を仏道に入れており、家門は富み年齢は若く、心に愁いなどないのに、思いきって遁世した」という記述の範囲にあるといつてよい。」³²といわれていることで説明ができるように思われる。

また、重複になるが、義清の生きた元永元年（1118）から没する文治六年（1190）という時代は、まさに「諸行無常、盛者必衰」の理をまざまざと凝視させられた時代であったが、それは今となつては過去のこととして語るができるが、当代でそれを予見できた人間がどれほどいたことであろう。しかし、如上義清はその立場から、律令体制の終焉から武者の世に移行する混乱期に突入することを予見していたのではないか、その煩わしさからの出家という選択に至ったのではないかという「政治原因説」も、たしかに考えられるかもしれない。

煩わしいということでは、佐藤氏³³は『台記』は、在俗時の西行について「心に愁ひ無し」（永治二年三月十五日条）と伝えている。（中略）西行には自己の前途の在りようがはっきりと見通せた。「心に愁ひ」のない恵まれた状況が西行にそれを映し出して見せたのである。そのうちのどれを撰ぶこともできる。どれを撰んでもそのことに熱中できるであろう。周囲のひとびともそれぞれの思惑があつてのことにせよ、そうした自分をあれこれと援けてくれるであろう。みずからの才と富をもってすればそのいずれもそれなりに達成することができるであろう。だがそのうち

のどれを達成したところで一体どれほどのことがあるであろう。どれも壁のこちら側のことでしかない。壁を破ることはなにを撰んでも不可能であろう。うまくいけばあるいは五位の官人になれるかもしれない。たとえなることができたとしても宮廷社会は相変わらず手の届くものとはなりはしないであろう。世俗世界の日常がこのまま延長されていくかぎり、なにを撰んだところで宮廷社会から疎外されたままであるだろう。すべてが空しく見える。その空しさが鬱屈となって重苦しく心の底に澱んでいる。西行は、鬱屈に気づかされずにはいなかった」と出家の心因を捉えている。

いずれの説を徴証しようと試みても、あくまでも蓋然性の動機であって実証的な事実として扱うには至らないことから出家の動機を解明することはむずかしい。しかし上位には就けないにしても、ある程度の昇進は可能であるし、天皇や院をはじめ貴顕の側近という安定した地位にいたにもかかわらず、それらも家族も捨て、二十三歳という若さで出家したという事実はただならぬことである。一方では、常磐の三兄弟や西住、出家年齢が大きく異なるとはいえ平清盛や藤原俊成、定家といった西行の周りをとってみてもこれだけの出家者がいることを考えれば、当代において出家という行為自体がそれほど大仰なことではなかったのかもしれないという仮説も立てられるかもしれない。実はそれは、後世の人々が大袈裟に推論しているだけであって、当人としてはそれほどのものではなかったとも考えられるかもしれない。

もちろん、まったく原因も動機もなく出家をしたはずはないであろう。しかし、原因・動機は存在しても、出家の目的もしくは出家することで達成する目的はなかったのかもしれない。否、出家というものが本来は佐藤氏³⁴のいわれるように「世俗世界」から遁れて「原郷世界」に至る過程を経るためのステップということであるとすれば、そして実際的には生きて「原郷世界」に至ることができないのであれば、目的があること自体がパラドクスとなってしまう。そして、出家に際して地位も名誉も家族も捨てたとはいえ、残存する家集だけでも二千首以上の歌稿を終生手元に置いていたということは、出家という行為の対極にあることともいえるのではないだろうか。西行＝出家という冠はかれを魅力的にするものだが、その反作用として出家という言葉でかれにヴェールをかけてしまっているのかもしれない。決して、かれを半ばの出家者というのではない。むしろその逆であって、そのような迷い・苦心から離脱することができなかったからこそ、西行という人間に魅了されつづける人が引きも斬らない、愛すべき人物だといえるのである。そうであるならば、

当世の出家がいかなるものであったのかが明確にならない以上、一度そのヴェールを脱ぐって、かれの残したのものから純粹にかれの思想をたどるだけでも、西行という人物像を追うことはできるのではないだろうか。すなわち、最大の謎といわれている出家の動機ということへの意識を外して、かれの思想や行動をただただ追うだけでも十分な研究成果となりえるのではないだろうか。いや、言うは易しであって、それだけでも骨の折れる作業であるのには変わりはないのだが。

もはや出家なる行為は、実際の出家とはいかなることなのかということを考えつづけることなのかもしれない。つまり、出家をしたときには、出家の何たるかはわかりようもなく、出家というものに足を踏み入れてからそれを知りはじめるのではないだろうか。山家集にある出家直後に詠まれたと思われるこれらの歌からそのような思いに駆られてしまうのである。

1416 すてたれどかくれてすまぬ人になれば 猶よにあるににたる成けり

1417 世中をすてゝすてえぬこゝちして みやこはなれぬ我み成けり

1418 すてしをりのこゝろをさらにあらためて みるよの人に別はてなん

IV 第二期「京洛時代」

1. 草庵閑居

出家した西行は、草庵に閑居することとなる。しかし閑居とはいっても、そこは京周辺がベースとなっていた。ときには山深く孤独に暮らしてもいたが、周囲には同じような隠遁者が同じような庵を結んでいた平安京近郊での暮らしが主であった。それは、たしかに山家集に収められる作品からうかがうことができる。なかでも、最も縁のあったのは東山と嵯峨である。出家直後のこの京洛時代に東山に庵を結んだことは、

世をのがれて東山に侍けるころ、白川の花ざかりに人さそひければ、まかりてかへりてむかし思出て

104 ちるをみてかへるこゝろやさくらばな むかしにかはるしるしなるらん

の詞書から知ることができる。嵯峨についても、

さがにすみけるに、みちをへだてゝ房の侍けるより、梅の風にちりけるを

- 38 ぬしいかに風わたるとていとふらん よそにうれしき梅のにほひを
さがにすみけるころ、となりの坊に申べきことありてまかりけるに、みちもな
くむぐらのしげりければ
471 立よりてとなりとふべきかきにそひて ひまなくはへるやへむぐら哉

の詞書から判断できる。この間の西行の住まいとなったすべての場所やその順をたどることはほぼ叶うことはないが、詞書などを手掛かりに草庵生活を送ったいくつかの場所を限定することはこれまでの研究でなされてきた。たとえば、在俗時代に同行西住と訪れた空仁上人の法輪寺にもしばらく暮らしたこともあった。

- 秋のすゑに、法輪にこもりてよめる
484 おほ井河井せきによどむみづの色に あきふかくなるほどぞしらるゝ
485 わがものとあきのこずゑをおもふかな をぐらのさとにいゑみせしより
486 山ざとは秋のすゑにぞおもひしる かなしかりけりこがらしのかぜ

また、「鞍馬」においては、

- よをのがれてくらまのおくに侍けるに、かけひこほりて水まうでござけり、は
るになるまでかく侍なりと申けるをきゝてよめる
571 わりなしやこほりかけひの水ゆへに おもひすてゝしはるのまたるゝ

という歌を詠んでいるが、これなどは冬になると筧が凍ってしまうことで水が来なくなってしまう、それが解けるのは春になるまで待たないといけないということがわかったという、閑居におけるふとした出来事に気づかされている節が想像できる。そこから、これが草庵暮らしにまだ慣れていない時期のことであって、出家直後の冬頃に「鞍馬」に庵を結んでいたのではないかということから凡その年時が推定できる。

また、東山ではこのような歌も詠まれている。

- 長楽寺にて、よるもみちを思ふと云事を人とよみけるに
491 夜もすがらをしげなくふくあらし哉 わざとしぐれのそむるこずゑを
野辺寒草と云事を、双林寺にてよみけるに

506 さま／＼に花さきけりと見しのべの おなじいろにもしものがれにける

この二首では一定期間そこに庵を構えたかどうかは判断できないが、そこが天台宗の寺院であることが注目されるべきところである。この出家直後の京洛時代の次には、30年近く基盤を置くこととなる高野山時代がやってくる。出家にあたって真言の道に励み、その後真言浄土へと変遷をたどる西行の仏道ではあるが、かれの自由な性情からして宗教に対しても垣根がなく、これらの歌を引いて青年期あたりまでは天台宗にも精進していたという説を唱える諸家もおられる。たしかに、晩年になりその後四度の天台座主となる若かりし慈円や高山寺の名僧となる明恵とも、年齢差を超えた人間同士の深い共鳴による関係を結ぶことなどから、西行の宗教へのスタンスは非常に寛容なものであったと思える。さらに目崎氏『西行の思想的研究』には、「西行の信仰はいわゆる雑修であり、本格的に台密なり東密なりを修行した形跡は認められない。むしろその法名「西行」が端的に示すように、時代を覆う浄土教の信仰を基調としている」とある。その通りであろう。

他方、京洛を離れた山深くでの草庵生活にまつわる歌は以下などが挙がる。

991 山ふかきかすみこめたるしばの庵に ことゝふ物はうぐひすのこゑ
やまごもりして侍けるに、としをこめてはるになりぬときゝけるからに、かすみ
みわたりて、山河のをと、ひごろにもにずきこえければ
1059 かすめどもとしのうちはとわかぬまに 春をつてなる山河の水

このように、出家後西行は、東山や嵯峨、鞍馬、山深きところなどに転々とその居を移し歩いたのだが、それは前章6.「出家」でも触れたように、出家をしてはじめて出家の何たるかをみつけることをはじめた西行は、その行動においても定まることができなかつたのかもしれない。それは、まさに虚空を感じずにはおられない状態であって、いいようのない焦りやそこから生じる物足りなさがその転居生活にいたらしめたのかもしれない。佐藤氏³⁵も「草庵はいずれも在俗の頃に訪れたことがあ」ったので「大体の様子をすずに見知って」はいたが、「かつて思い描いていた在りようとのずれ」を感じ、「そのずれがどのようなずれなのか」がわからないことが西行を「落ち着かなくさせてい」て、その結果「憑かれたように草庵から草庵へと流離していく」と考えておられる。

2. 皇室内の騒動

そのような出家直後の草庵暮らしのビギナー段階にあった時期に、西行の人生や思想にとって鍵となる人物たちに大きな動きが生じていた。

西行が出家した翌年の永治元年(1141)三月十日鳥羽院が三十九歳で落飾された。それは十五年後に勃発する保元の乱へとつながる元凶となっていくこととなる。

この鳥羽院落飾までにはいくつかの大きな布石がある。西行が十七歳のとき、長承三年(1134)に六条長実(顕輔の兄)の女得子が入内しているのだが、それから五年後の保延五年(1139)五月に躰仁親王が生まれると、八月にははやくも立太弟の式が行なわれた。しかしこれは、崇徳天皇の皇子にはまだ立太子の沙汰がなかったにもかかわらずのことであった。崇徳天皇の出自にまつわることから犬猿の間柄であった鳥羽院と崇徳天皇だが、それが決定的に具現化されてしまったのである。そしてそれは、鳥羽院の躰仁親王への愛情とその母得子への愛情の現れでもあったことから、崇徳天皇のみならず母であり鳥羽院皇后である待賢門院璋子にとっても衝撃的な出来事であった。その二年後に、鳥羽院は落飾されたという経緯である。

その翌年の康治元年(1142)二月二十六日には、今度は待賢門院が四十二歳で落飾されたのである。崇徳讓位からほんの二ヶ月後のことである。入内後からの得子への寵愛をいやというほどに実感していた八年間を考えれば、この一件が門院に出家を決心させる引き金になったと考えるのは自然な流れかもしれない。

この一連の出来事の大半は、西行の在俗時代に展開されていたことである。鳥羽院の側近としてもあり、待賢門院・崇徳天皇ともつながりをもっていた西行であれば、実情に通じていたことであろう。鳥羽院、そして待賢門院・崇徳の双方との間にあった西行であるが、門院落飾にあたってその女房である中納言局からその御結縁のために法華経廿八品の題が届けられたことで歌を詠み(『聞書集』)、自筆一品経供養勸進のために諸名流の邸に推参している。そして、前に引いた『台記』にあるように三月十五日には、内大臣藤原頼長を訪れている。ちなみにこれは、西行が出家していたことが可能たらしめた所業である。在俗時の身分であれば、これら貴顕の邸に入ることはむずかしかったはずである。しかし、単なる出家者ができる所業かといえ、そうではないことも事実である。そこには、在俗時代に隨身していた徳大寺家の影響力が多分にあったはずである。たとえば、頼長の妻の幸子は徳大寺実能の娘であり、待賢門院は叔母となる。このような縁から頼長邸を訪ねることができたのであろう。

門院の落飾にともない、その女房であった堀河局・中納言局も出家している。そ

のとき、女房の一人であった堀河局の妹兵衛局も出家を願ったが叶わず、統子内親王（後の上西門院）の女房となった。

しかし、それだけでは終わらなかった。落飾後三年が経った久安元年（1145）八月二十二日、待賢門院璋子が四十五歳で崩御されたのである。西行二十八歳のときであった。ただならぬ衝撃であったであろう。門院がその生涯を終えられてから一周忌を迎え、女房たちのなかには草庵や尼寺へ入る者もあった。それらの人々とのつながりは、その後の西行にとっての作歌サークルのひとつとなった。西行は彼女らのもとを訪れて門院追慕の作歌をしている。

堀川の局、仁和寺にすみけるに、まいるべきよし申たりけれども、まぎるゝ事ありて程へにけり、月の比まへをすぎけるをきゝて、いひをくりける
854 にしへ行しるべとたのむ月かげの そらだのめこそかひなかりけれ
かへし
855 さしいらでくもぢをよぎし月かげは またぬ心ぞゝらにみえける

3. 初度陸奥の旅

西行の生涯において初めての長旅は、初度の陸奥への羈旅である。この陸奥へは二度訪れている。二度目の旅については、『吾妻鏡』に記載があることでその年時を確定することができるのだが、初度のそれについては年時を知るに拠るべきものがない。そこで、諸家によりいくつかが推定されている。川田氏の説はこうである。康治二年（1143）に菩提院前齋院（上西門院）の女房である兵衛局と旅に出るに当たっての別れの応答歌をもって出立し、翌天養元年（1144）「詞花集の歌を召さるる頃」までには帰洛するというものである。尾山氏は、「西行二十七八歳の天養久安の頃と推定されてゐる」と書いたと思いきや「壮年の時（少なくとも三十歳以前）」とも推定する。同じく風巻氏も「三十の境に近づくころ」とこれまた大きな括りでの推論である。窪田氏は「長途の旅に出ようと計画を立てた主体的条件が三十歳の頃のほうが強いのではないか」と考えた。そして、目崎氏は、風巻・窪田両氏の三十歳説を批判した臼田昭吾氏の論文「西行の初度陸奥の旅に就いて—その時期と意義—」³⁶に賛同して二十六、七歳の旅とした。その臼田氏の根拠は、三十歳説の根拠である「待賢門院崩御」が原因だとした場合、「その一端を現わすような心の影かかけらが、陸奥の旅の作品の中に見出されてしかるべき」であろうが、それどころか「どこか明るい、のびやかな心がこの旅の作品を統一してい」て、旅の目的が「仏道修行とか人生修行という、重苦

しい形のものではなかったように思われる」ので、陸奥の旅で作歌された確実な作品を考証したうえで、かれの「関心が仏道修行よりも、古歌や歌枕にあ」り、「能因を追慕するの情が唯ならぬものであ」り、「作歌の際に踏まえた作品は、すべて実際に陸奥を旅した人達ばかりである」ことを挙げ、「この旅の目的が、能因を中心とする先行歌人の跡を追って、陸奥の歌枕を実地に訪ねながら和歌修行をする点にあった事」とした。そこで臼田氏が前提とされたのは、

みちのくにへ修行してまかりけるに、白川のせきにとゞまりて、ところがらにや、つねよりも月をもしろくあはれにて、能因が、秋かぜぞふくと申けんをり、いつなりけんと思いでられて、なごりおほくおぼえければ、せきやのはしらにかきつけゝる

1126 しらかはのせきやを月のもるかげは 人の心をとむる成けり
せきにいりて、しのぶと申わたり、あらぬよのことにおぼえてあはれなり、みやこいでし日かずおもひつゞけられて、かすみとゝもにと侍ことのあとたどりまできにける、心ひとつに思しられてよみける

1127 みやこいでゝあふさかこえしをりまでは 心かすめし白川のせき
たけくまのまつもむかしになりたりけれども、あとをだにとて、みにまかりてよみける

1128 かれにける松なきあとのたけくまは みきといひてもかひなかるべし
ふりたるたなはしをもみぢのうづみたりける、わたりにくゝてやすらはれて、人にたづねければ、おもはくのはしと申すはこれなりと申けるをきゝて

1129 ふまゝうきもみぢのにしきちりしきて 人もかよはぬおもはくのはし
しのぶのさとよりおくへ、二日ばかりいりてあるはしなり
なとり河をわたりけるに、きしのもみぢのかげをみて

1130 なとり河きしのもみぢのうつるかげは おなじにしきをそこにさへしく
十月十二日、ひらいつみにまかりつきたりけるに、ゆきふり、あらしはげしく、ことのほかにあれたりけり、いつしか衣河みまほしくてまかりむかひてみけり、かはのきしにつきて、衣河の城しまはしたる、ことがらやうかはりて、ものを見る心ちしけり、みぎはこほりて、とりわきさへければ

1131 とりわきて心もしみてさえぞわたる 衣河みにきたるけふしも
又のとしの三月に、出羽国にこえて、たきの山と申山寺に侍けるに、さくらのつねよりもうすくれなゐの色こき花にて、なみたてりけるを、てらの人／＼も

見けうじければ

1132 たぐひなきおもひいではのさくらかな うすくれなみの花のにほひは
下野国にて，しばのけぶりをみて

1133 みやこちかきをの大はらを思出る しばのけぶりのあはれなる哉
おなじたびにて

1134 かぜあらきしばの庵はつねよりも ねざめぞものはかなしかりける

これら九首が一連となっている作品である。切り口鋭い考証である。たしかに陸奥の旅に関する作品からは、「古歌」「歌枕」「能因追慕」「陸奥を旅した人達」というキーワードは浮かび上がってくる。しかし、家集からの情報だけではそれらが初度の旅なのか晩年の旅なのかの年時は判別が困難である。二度目の旅が、東大寺再建のための勧進が目的であることなどを考慮すれば、たしかに臼田氏の考証されている作品群は初度行のものと思われる。ただ、その論については首肯するにしても、「どこか明るい、のびやかな心がこの旅の作品を統一」「仏道修行とか人生修行という、重苦しい形のものではなかったように思われる」と結論づけるのは早いのではないだろうか。たとえば、西行の残した作品のなかには、徹底して歌にしないものがある。ひとつに、身内親族についての歌がないということが挙げられる。それについても諸説あるところだが、何を意図しているものであるにせよ、そこには確固たる西行の意思が反映されたうえでのことというのは間違いのないところであろう。その作歌しないという徹底ぶりが、この初度陸奥行においても行なわれたのではないだろうか。つまり、待賢門院敬慕の感傷に浸り思念を表象させることや、釈教歌などによって思想を表出させることで無常観などに触れる危険性を回避したいと考えていたのではないだろうか。否、そこまで厳密でなくとも、長い旅路の間には歌枕をモチーフにするときもあれば、心を詠むこともあるであろう。そして、その比重が前者になっただけのこととも推察はできる。自由でもあり、自由を求めている西行の性情からして、そのようにも言いえるのではないだろうか。とすれば、このような仮説を立てることができるかもしれない。上述のキーワードをもとにした旅は以前から想定していた。しかし当時の旅は、当然現代の旅行とはまったく異なるのは周知である。となれば、出立には相当な覚悟と慎重さが必要だったはずである。つまり、西行といえども思い立つがままに旅に出ることはなかったであろう。そこで、いつかこれらを目的として旅に出ようと温めていた計画が、何かのきっかけで実行に移せたとは考えられないだろうか。これは、出家の際の構造とも近い

もしれない。出家をするまでには、煩悶しながら時間を費やし、実行に移すときには何か大きなきっかけが後押しするという構造である。そのような考えをすれば、たしかに旅の目的は臼田氏の説となったとしても、旅へのきっかけは「待賢門院崩御」から生じた「仏道修行」や「人生修行」への衝動だったということもできるのではないだろうか。そしてその帰路につく間に、出家の何たるかを求め転居をくり返した生活から、仏心という一つの指向に帰着し、それが高野へと傾いていったのかもしれない。すなわち、この初度陸奥行が、京洛時代から高野中心時代への転換点となったとの説に同意したいのである³⁷。

4. 大原の三寂

鳥羽院落飾から始まった近衛帝の擁立、それに伴う崇徳院の失脚、心悩ませたうえでの出家を選択した待賢門院、そして卒去。それが契機となり出立した初度陸奥行という流れのなかに身をおいていた京洛時代だが、一方で決して広く派手なものではなかったが新たな人間関係が生じたり、西行の生涯において必定の関係になっていくサークルが形成された時期でもあった。その一つが、大原の三寂（常磐の三寂）との関係である。藤原北家閑院左大臣冬嗣の子長良の家筋にあたる丹後守為忠を父にもつ三兄弟のことである。この三兄弟は西行にとっては親密な交際をつづけていく大切な友である。このつながりができたいきさつを風巻氏³⁸は、富倉徳次郎氏は『大原の三寂』「多磨」において幼馴染ととらえ、尾山氏は『西行法師評伝』において義清の歌の師と推定しているとしたうえで、それらを包摂するように「みなが同じ権門の光の及ぶ範囲に生きていた者同士」であるとしている。前章でも触れたが、天養元年（1144）に崇徳院から『詞花集』撰進の宣下があったとき、兄弟はすでに滅していた父為忠の名誉のために生前の歌稿を撰集資料として撰者の藤原顕輔へ届けている。その献上に際して、寂超が西行へ下見を依頼したのである。ときに西行二十七歳であった。その行為からも浅からぬつながりであったといえよう³⁹。その際の応答歌が、西行との間に残っている作品の最初のものとなっている。

新院哥あつめさせおはしますときゝて、ときはにためたゞが哥の侍けるを、
かきあつめてまいらせけるを、おほはらよりみせにつかはすとて

寂超

929 もろともにちることのはをかくほどに やがてもそでのそぼちぬる哉
かへし

930 としふれどくちぬときはのこのの葉を さぞしのぶらんおほはらのさと

寂超は俗名を藤原為隆といい，兄弟のなかでは最初に出家して大原に隠棲している。西行の出家から三年後である。「妻を捨て，大原にこもって仏道修行の生活をし，作歌にも精進したのは西行に似ている」，また別の表現をすれば「西行の出家に共通するものがあり，また西行の出家のあとを慕ったのかも知れない」と窪田氏は『西行の研究』において考えておられる。この寂超を挟んで，兄に寂念（俗名為業），弟に寂然（頼業）となり，寂超の次に出家したのは弟の寂然，最後は寂念の出家をもって「大原の三寂」と呼ばれている。しかし，富倉氏は寂念については大原で暮らしていた形跡が確認できないことから「大原の三寂」という呼称が事実にはそぐわないとしたことで，「常磐の三寂」と呼ばれることもある。

窪田氏は，先に挙げた寂超と西行の共通性をより克明に考察されているのであるが，両者ともに「僧侶とはなっても僧界に地位を求めようとする意志は全くなく，歌人としての地位を得ようとして中央の歌界に関わりをつなごうとする欲望もな」く，それ以上に「いさぎよく中央歌界から離れようとしたことは，生活に即した素直な，純粋な作歌をしていくことで，文学的抵抗をひそめているもの」であったとしたことを評価したうえで，その一方ではそうした中央歌界とは一線を画そうとしていたサークルが「勅撰集に入撰したいという願い」があることが，

寂超，ためたゞが哥に我哥かきぐし，又をとうとの寂然が哥などとりぐして，
新院へまいらせけるを，人にとりつたへてまいらせさせけりときゝて，あにゝ
侍ける想空がもとより

931 いゑのかぜつたふばかりはなけれども などかちらさぬなげのことは
返し

932 いへのかぜむねとふくべきこのもとは いまちりなんとおもふことは

この二首の「家の風」歌から想像でき，後に『千載集』撰進の折に西行が俊成へ歌稿を送った際のやりとりと同様の思いを感じるところである。しかしそれは，「当代の勅撰集の権威がいたらせるものであ」と同時に，「作歌生活の在り方とは別個のものとして考え」ておくべきことであると指摘されている。これなどは，西行の出家の本質をとらえるうえでの重要な鍵のひとつとなりうるものであろう。

この三寂のなかでは，寂然と西行の間で交わされた応答歌が最も多く残っている

ことから歌友としての親密度が強いと考えられている。また、西行の同行西住が治承三年頃に没した際の応答歌からも二人の仲を想像することができる。

同行に侍ける上人、をはりよく思さまなりときゝて、申をくりける

寂然

805 みだれずとをはりきくこそうれしけれ さてもわかれはなぐさまねども
かへし

806 この世にてまたあふまじきかなしさに すゝめし人ぞ心みだれし
とかくのわざはてゝ、あとのことゝもひろひて、かうやへまいりてかへりたり
けるに

寂然

807 いるさにはひろふかたみものこりけり かへる山路の友はなみだか
返し

808 いかにもとおもひわかずぞすぎにける 夢に山路を行心ちして

しかしその点について、西行と三寂の間で交わされた応答歌が作られたのは若かりし頃からであったことから、「まだ家集など作る年でもないし、家集などを編むような要求を受けるほどの重鎮でもない」時代のものなどは「散佚しやすい」だけでなく「恋でもしていた時のものででもなければなかなか残しておく気づかいはない」ので、実際にはもっと多く作品が残っていたであろうことを考えておく必要があると風巻氏⁴⁰はいう。とはいえ、この三寂を含め、父為忠のときからの常磐家サークルが、歌人西行の成長においては甚大な役割を担ったものであったことは間違いのないところである。

5. 待賢門院の女房たち

大原の三寂とならんで、この京洛時代から西行が作歌でのつながりをもつようになったサークルに、待賢門院の女房たちとのものがある。待賢門院と西行の年齢差が十七歳であったことを考えれば、女房たちの年齢は不明であるがかなり西行よりも年長であったことは推測できる。当然、在俗時代の北面の頃から鳥羽院―待賢門院ラインによって面識はあったはずである。だからこそ門院落飾の際に、法華経廿八品の詠歌を中納言局から依頼されたのであろう。そして、この頃に「作歌の上で交渉」がはじまったのではないかと窪田氏⁴¹は見ている。高木きよ子氏⁴¹によれば、

「西行の歌に登場する女性は二十名ほど」とのことだが，そのうちの堀河局・中納言局・兵衛局・帥局・加賀・紀伊二位局の六名が該当すると『西行研究録』⁴²で川田氏は書かれている。堀河局との間では前掲の「待賢門院崩御」における応答歌があり，中納言局においては，

待賢門院中納言のつぼね，よをそむきてをぐら山のふもとにすまれけるころ，
まかりたりけるに，ことがらまことにいうにあはれなりけり，風のけしきさへ
ことになしかりければ，かきつけゝる

746 やまをろすあらしのをとのほげしさを いつならひける君がすみかぞ

この一首から，待賢門院の一周忌の後に出家して小倉の庵で暮らしはじめ，そこへ西行が訪ねてきたことがわかる。兵衛局は，堀河局の妹で，門院落飾後に統子内親王（のちの上西門院）に出仕することになった方で，

229 さきだゝばしるべせよとぞちぎりしに おくれておもふあとのあはれさ⁴³

などの歌が『聞書集』に残る。帥局は，

をぐらをすみすてゝ，高野のふもと，あまと申山にすまれけり，おなじ院の帥
のつぼね，みやこのほかのすみかとひ申さで，いかでかとしてわけをはしたりけ
る，ありがたくなん，かへるさに，こかはへまいられけるに，御山よりいであ
ひたりけるを，しるべせよとありければ，ぐし申てこかはへまいりたりけり，
かゝるつみではいまはあるまじき事なり，ふきあげみんといふこと，ぐせられ
たりける人／＼申いでゝ，ふきあげへをはしけり，道よりおほあめ風ふきて，
けふなくなりけり，さりとは，ふきあげにゆきつきたりけれども，見所な
きやうにて，やしろにこしかきすへて，おもふにもにざりけり，能因が，なほ
しろ水にせきくだせとよみていひつたへられたるものをとおもひて，やしろに
かきつけゝる

748 あまくだるなをふきあげの神ならば 雲はれのきてひかりあらはせ

749 なほしろにせきくだされしあまの川 とむるもかみのこゝろなるべし

の中納言が高野山の天野別所に住むようになったころの暴風雨の折の詞書がある歌

に出てくる方である。大宮の女房加賀は、門院卒去後に太皇太后多子に出仕し、

しほゆにまかりたりけるに、ぐしたりけるひと、九月つごもりにさきにのぼり
ければつかはしける、人にかはりて

1122 あきはくれ君はみやこへかへりなば あはれなるべき旅の空かな
返し 大宮の女房 加賀

1123 君ををきてたち出る空の露けさに 秋さへくるゝ旅のかなしさ

に出てくる。そして、紀伊二位局は平治の乱で命を落とした藤原信西の妻であり、後白河天皇の乳母であった方である。仁安元年（1166）に亡くなられた際に、西行は以下の歌から始まる十首の歌を複数人で詠んでいる。

院の二位のつぼねみまかりけるあとに、十首哥人／＼よみけるに

817 ながれ行みづにたまなすうたかたの あはれあだなるこの世なりけり

818 きえぬめるものしづくをおもふにも 誰かはすゑの露の身ならぬ

819 をくりをきてかへりしのべのあさ露を 袖にうつすは涙なりけり

820 ふなをかすそのゝつかのかずそへて むかしの人に君をなしつる

821 あらぬ世の別はげにぞうかりける あさぢがはらをみるにつけても

822 のちのよをとへとちぎりしことの葉や わすらるまじきかたみなるべき

823 をくれゐてなみだにしづむ古郷を たまのかげにもあはれとやみん

824 あとをとふみちにやきみはいりぬらん くるしきしでの山へかゝらで

825 名残さへほどなくすぎばかなし世に なぬかのかずをかさねずも哉

826 あとしのぶ人にさへまたわかるべき その日をかねてちるなみだ哉

門院崩御を境にして、敬慕していたその亡き門院に結びつけられる形でつくられた、尼となった堀河局、高野で生活を送るようになった中納言局、亡き母の面影を残す統子内親王に仕えるようになった兵衛局たちとのサークルは、西行にとっては門院の面影を共有しながら追慕することのできる、常磐のサークルとは異なった共振部分を持ちえるものであったはずである。

注

- 1 川田順『西行研究録』 創元社，1940
- 2 風巻景次郎『風巻景次郎全集（第8巻）中世圏の人間』第一部「西行」 桜楓社，1971
- 3 窪田章一郎『西行の研究—西行の和歌についての研究』20頁 東京堂出版部，1961
- 4 吉本隆明『西行論』 講談社，1990
- 5 目崎徳衛『西行の思想史的研究』 吉川弘文館，1978
- 6 前掲書（目崎）第二章「佐藤氏と紀伊国田仲庄」
- 7 尾山篤二郎『西行法師全歌集』 創元社，1952
- 8 前掲書（風巻）
- 9 水原一『延慶本平家物語論考』 中道館，1979
- 10 堀部正二「西行と蹴鞠」（中古日本文学の研究）前掲書（目崎）より引用。
- 11 前掲書（目崎）第一章「西行の系累」
- 12 石田吉貞『新古今世界と中世文学』下「西行の家族的周辺」 北沢図書出版，1972
- 13 前掲書（窪田）
- 14 『古今著聞集』第十五巻
- 15 前掲書（風巻）68頁
- 16 『長秋記』「保延元年七月二十八日条」
- 17 前掲書（風巻）73頁
- 18 本稿に引用した脚注の付かない西行歌抄及び歌番号は、久保田淳編『西行全集』「山家集」に拠る。
- 19 尾山篤二郎『西行法師評伝』 改造社，1934
- 20 しかし、『新古今集』には採られていないところをみると、藤原俊成には評価されていたがその子定家はそうではなかったのかもしれない。
- 21 安田章生『西行』19頁 彌生書房，1993
- 22 『山家集』等いくつかの書では堀川局となっているものもある。
- 23 白洲正子『西行』 新潮社，1996
- 24 前掲書（白洲）58頁
- 25 このとき、妹の兵衛局は姉同様に追従しようとするも、堀河局に諭され門院の皇女である統子内親王、後の上西門院の女房となる
- 26 西行が『詞花集』一首、『千載集』十八首入集ということに比すればその力量は一目瞭然である。
- 27 前掲『西行全集』「西行和歌集成（勅撰和歌集）」からの引用。『詞花集』（雑下，371）
- 28 高木きよ子『西行の宗教的世界』79頁 大明堂，1989
- 29 角田文衛『待賢門院璋子の生涯』 朝日新聞社，1985
- 30 佐藤正英『隠遁の思想』第一章「世俗世界からの離脱」 筑摩書房，2001
- 31 目崎徳衛『数寄と無常』第一「北面佐藤義清とその遁世」17-18頁 吉川弘文館，1988

- ³² 前掲書（吉本）50 頁
- ³³ 前掲書（佐藤）113-114 頁
- ³⁴ 前掲書（佐藤）80 頁
- ³⁵ 前掲書（佐藤）149-150 頁
- ³⁶ 静岡英和女学院短期大学研究紀要第1号，1968/2
- ³⁷ とはいえ，出立の時期を決定づけるだけの資料をみない現在では二十六歳から三十歳という範囲を絞りきる術はないので，この考察もどうしても推測の域を脱しえないということになる。
- ³⁸ 前掲書（風巻）
- ³⁹ しかし，結果的に『詞花集』へは父為忠の歌のみならず三寂の作品も一首も採られなかった。
- ⁴⁰ 前掲書（風巻）93 頁
- ⁴¹ 前掲書（高木）56 頁
- ⁴² 前掲書（川田）23-34 頁
- ⁴³ 前掲『西行全集』「聞書集」からの引用。